

世界の巨匠たちの初顔合わせで贈る、今夏、最大の話題作

スペクタクル・オペラ  
見世物祝祭劇

## エレンディラ erendirira

原作 ガルシア・マルケス × 音楽 マイケル・ナイマン × 演出 蜷川幸雄

ノーベル賞作家ガルシア・マルケスによる極彩色の哀しき寓話は、最高級のペルシャ絨毯のような圧倒的濃度の情景描写で読む者すべてをその世界に呑み込む。疾走する百両の列車、雪化石膏の天使像、七色に変わるガラス細工、そして白鯨のような巨体を揺する、無慈悲でいて残酷な祖母。無垢な少女エレンディラは、この祖母に命ぜられるがままに砂漠で春を売りはじめる。だがそこにある日、空色の瞳を持つ墮天使のような青年ウリセスがあらわれ……。それぞれ蜷川演出は初となるウリセス役の中川晃教とエレンディラ役の美波に、この抒情的スペクタクル世界に飛び込むまえの心境を訊ねた。

文：岩城京子（フリーライター）



左より、蜷川哲朗（祖母役）、美波、中川晃教、國村隼（作家役） © 安部英知

A kinori  
Nakagawa

中川晃教（ウリセス）

ウリセスのことをすごく簡単に説明すると、彼は美しい女性に翻弄されてしまう少し純真な男の子（笑）。だけどそれだけではもちろんなくて、僕はこのウリセスという青年を非常に多面的に捉えているんです。たとえば彼は原作では「空色の瞳を持つ墮ちた天使のような金髪の青年」と描写されますが、だからと言って、ただ単に純粋で美しいだけの青年ではないと僕は思う。多分この描写は原作者がウリセスを象徴的に説明するときに使用した、いわば“言葉の世界でのイメージ”だと思うので。それを生身の人間として演じる僕としては、ピュアな容顔のなかに潜む痛みや汚れもきちっと出していく必要がある。フィルターを一枚かぶせた「作りごと」として世界を提示するのではなく、「生身の人間」を演じることが大事だと思うんです。

そんな僕にとってのウリセスのイメージは「砂」。表面は焼けるような熱さだけど、手をずぶつと突っ込むと湿気や冷たさを感じられて。見るだけのときと手で触れたときの印象がずいぶん違う。それでいて風のなかに放っておいたら消えてなくなっちゃいそうな儚さもあって、とても難しい役ですね。

とにかく僕は今回、人生初のストレートプレイに挑むことになる。なので劇中、歌を歌ったりすることもあります。そうした自分の得意分野ばかりに頼らず、今までの中川晃教を一度すべて壊したところから始めたいと思っています。だって蜷川さんの作品を観ることは誰でもできるけど、蜷川さんの世界に入って“体感する”ことができるのは限られた人間だけです。空っぽの状態で稽古場に入って行って、なるべく色んなことを体感したい。それで蜷川さんと一緒に、素晴らしくスペクタクルな世界を上げていければと思います。

M inami



美波（エレンディラ）

私はもともと美しさと毒が表裏一体になったような世界観が大好きなんです。たとえば寺山修司さんの文学とかもそう。なので今回、ガルシア・マルケスの原作小説に初めて触れたときも「ああ、すごく素敵な世界だな」とずっと共鳴することができた。ただあまりにも幻想的すぎて、本当に舞台化できるのか。そこには正直、不安も感じていました。だけど坂手洋二さんの脚本を読ませて頂いたら、原作以上にロマンチックで、ひとりひとりに癖のある人物像が描かれていて「あっ、これは素敵な舞台になりそうだ」と信じることができた。しかも蜷川さんは脚本に書かれていることを、本当に美しく再現して下さるでしょうから。鳥肌が立つような幻想的世界が、作り上げられるのではないかと考えています。

無垢な少女、と原作では言われるエレンディラですが、私のなかでの彼女は逆に“毒の花”のような存在。薄いオレンジの少女がふわっと熟して真紅の花になったと思ったら、すぐに緑になっちゃったみたい（笑）。なので美しい赤さで周りを惹き付けておいて、その実、なかには緑の毒を持っているという少女像を作り上げていきたいですね。だってエレンディラって時々、恐ろしいほどおばあちゃんに似て冷血なときがあるんです。表には出さない威圧感や怖さが秘められていて。ウリセスにも「あんたは満足に人も殺せないのね」と言い捨てたりする。そんなエレンディラのひやっとするような一面も大切に演じたいです。

あとは私の課題は、演技はもちろんのこと歌ですね。人前で歌うのは初めてなのですが、蜷川さんに「私、歌も頑張ります」と言いきってしまったので……。なるべく舞台上で「気持ちいいな」と思って歌えるよう稽古に臨んでいければと思っています。

## STORY

過失から祖母の家を全焼させてしまった少女エレンディラは、その責任をとるため、祖母により、娼婦として1日に何人もの客を取らされている。その美しさから、瞬間に男達の人気を集めていたエレンディラだったが、ある時、彼女は本当の愛を誓う美青年ウリセスと出会う。2人は祖母からの脱出を試みるが、あっさりとつかまってしまう。祖母から逃げるには彼女を殺すしかないと考えた2人は、それを実行しようとするが……。

蜷川幸雄演出 見世物祝祭劇

## 『エレンディラ』

砂漠に吹く風、男達の行列、人々が広場に集まり、祭りが始まる。その時、世界の中心で待ち望まれた奇跡の娘が現れる。その名はエレンディラ。

【日時】8月9日(木)～9月2日(日) 全27公演

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【原作】ガルシア・マルケス 【脚本】坂手洋二

【演出】蜷川幸雄 【音楽】マイケル・ナイマン

【出演】中川晃教 美波 國村隼 蜷川哲朗ほか

【チケット(税込)】発売中

S席12,000円 A席7,000円